

資料館だより

第55号

平成26年(2014)

3月31日発行



「横中馬獅子舞」太郎獅子頭（歴史民俗資料館特別展風景から）

武蔵村山市の中央北側に位置する横田・中村・馬場地区に伝わる「横中馬獅子舞」は、平成25年4月29日の例大祭を当地伝承260年記念として開催しました。資料館ではその例大祭の様子を練習風景とともに紹介し、獅子頭をはじめとして衣装や道具類を展示しました。その際、雌獅子花子の太鼓胴内に「宝暦2年(1752)」と墨書きされていたことが判明し、その歴史が証明されました。

1 はじめに

毎年恒例の夏休み子ども企画展では、地域の歴史や自然、文化をテーマとした展示を行っています。今年度は、当館収蔵の地図類と古写真を活用し、昭和30年代から現在にかけての武蔵村山の移り変わりを紹介しました。

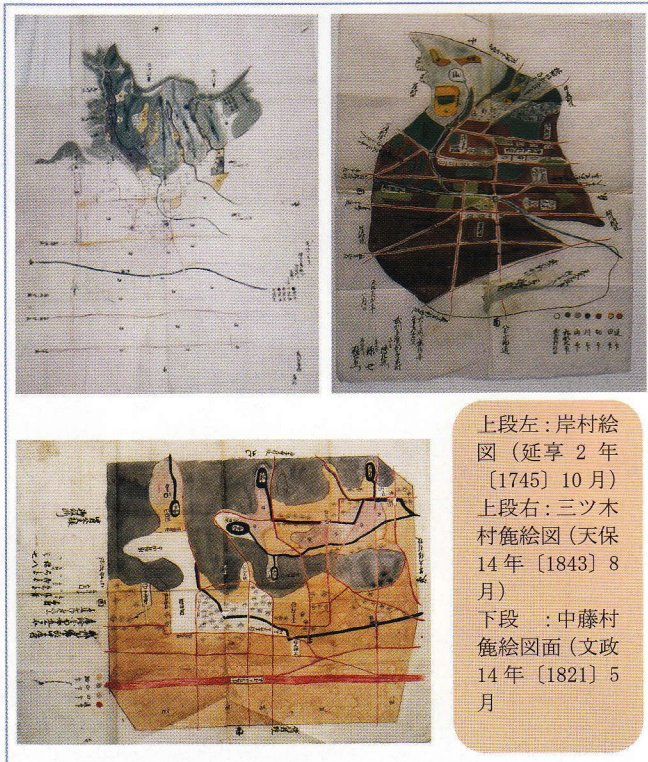
展示にあたり、市内を巡り事前調査を行いました。日に日に変わっていく街並みに驚きを覚えました。江戸時代から現在に至るまでの変化を地図と写真でご紹介します。

2 村絵図から地形図へ

武蔵村山市は、北側に狭山丘陵を背負い、いくつかの河川が南側の武蔵野台地へと流れているため、起伏に富んだ地形をしています。その土地特長は、小字（小名）から伺い知ることが出来ます。町名変更により、一部を除きその名前をみることはありませんが、今でも日常生活の中で使われることがあります。

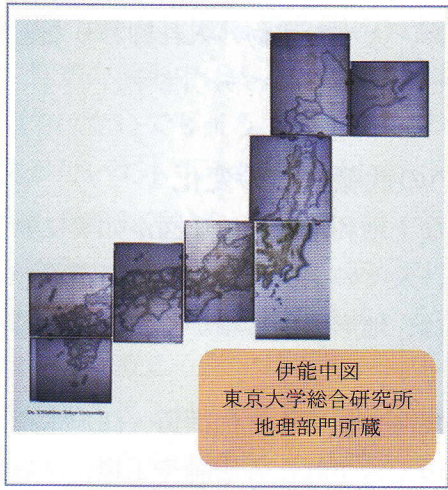
市内には、近世以降、奥多摩方面から江戸への物資供給のために整備された街道が、狭山丘陵に並行して東西に伸びています。また、それに直行する南北の道路は、所沢から砂川方面へと伸びています。それらの中継地点にあたる武蔵村山の人々にとって、のどかな農村文化を守りつつ、行

き交う人やモノの流通、情報を敏感に感じ取っていたことでしょう。武蔵村山には、中藤村（横田村）・三ツ木村・岸村の四つの村がありました。当時の様子を伺う資料の一つに絵図が上げられます。



絵図は、現在も各旧家で大切に保管をされていますが、それを見ると狭山丘陵を背に、東西に伸びる青梅街道を中心に田畑や家屋が展開されています。ほとんどの家屋は、青梅街道より北側に点在していましたが、残されている絵図類からみると、時代を経て南側への開発が進められていく経緯を伺い知ることが出来ます。（企画展「市内に残る江戸時代の村絵図」平成15年より）

江戸時代の著名な地図としては、赤水図（長久保赤水「改正日本輿地路程全図」安政8年完成）や伊能図（伊能忠敬「大日本沿海輿地全図」文政4年完成）などがあります。



しかし、一般的には幕府の指示による村絵図作成が主流でした。

明治時代に入ると、様々な経緯を経て陸軍参謀本部

(陸地測量部) が担当し、地形図 1/5 万/を 9 回・1/2.5 万を 4 回、測量・作成されています。

終戦間もなくの昭和 20 年 9 月、陸地測量部は解体され地理測量所が発足します。地図もそれぞれの目的に合わせて作られるようになりますが、昭和 35 年には、国土地理院と改称され、現在では国土交通省内の特別機関となっています。地図は、紙ベースのものが主流ですが、機械技術の発達によりデータ化された様々な地図を閲覧・利用することが可能となっています。

3 地形図からみた武蔵村山

武蔵村山市周辺は、時代と共に行われたさまざまな要因による土地利用の変化をみることができます。大正期には、狭山丘陵という東西に起伏に富んだ丘陵地帯を利用した村山・山口貯水池の建設。狭山丘陵を挟んでの西に J R 東日本(旧国鉄)八高線、東に西武鉄道の開通。市内では、旧陸軍関係施設の建設と撤退。戦後の米軍による横田基地(旧福生飛行場)に伴う関連施設の拡張。そして、高度成長期に行なわれた工場建設とそれに伴う宅地化。平成期の工場の撤退と区画整理など、その変化は地形図にも顕著に表れています。

①明治期から大正期

明治期、武蔵村山市周辺でもっとも古い地図は、明治 14 年から測量された 1/2 万の迅速測図です。

次に明治 41 年の 1/5 万の地形図があります。明治から大正期の武蔵村山周辺は、ジグザグに曲がった青梅街道の南北に集落が展開する中藤村(横田村)・三ツ木村と青梅街道北側の狭山丘陵寄りに集落が展開した岸村があります。

水田は、狭山丘陵の谷戸に点在し、青梅街道南側には、三ツ木村残堀の集落以外は、見渡す限りの畑や桑畑が広がっています。一面に広がった桑畑は、この時期に養蚕が大変盛んであったことを物語っています。江戸期の雰囲気も多く残した武蔵村山は、貯水池建設という一大工事により、人口の増加がはじまり大正期以降、さらに大きな土地利用がされることとなります。

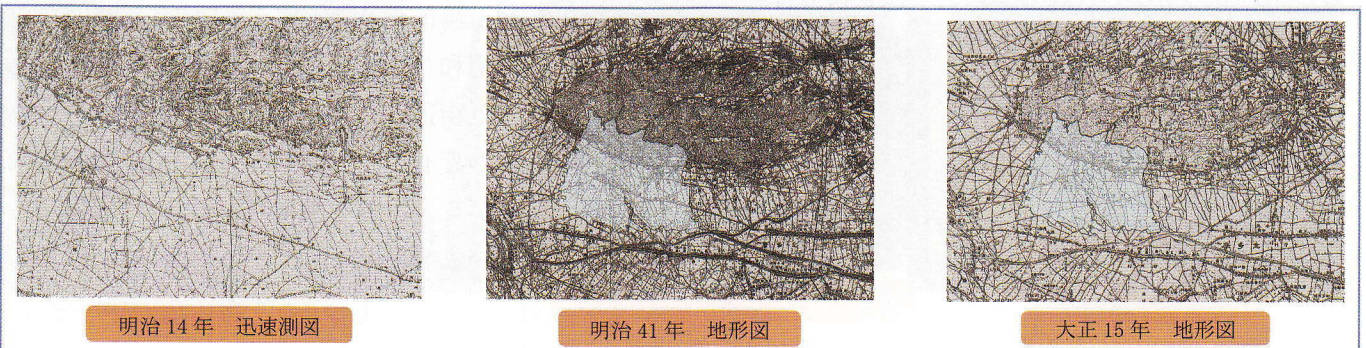
②昭和初期と戦後(昭和 5 年と 27 年)

昭和 5 年の地形図を見ると狭山丘陵内には、大正 7 年の羽村・村山線敷設工事から始まった村山貯水池が完成しています。また、村山村役場の位置が、現在のりそな銀行周辺にみられます。

昭和 27 年の地形図を見ると、昭和 9 年に完成した山口貯水池がみられます。役場は、現在の市役所の位置へ移動しています。大南周辺の陸軍関連の施設跡地、そして、福生市に所在する福生飛行場の範囲が空白となって表されています。また、八高線も敷設され、戦時中の土地利用の変化を伺い知ることができます。青梅街道では、原山から神明へと抜けていた道筋が、原山の犬曲を經由して鍛冶ヶ谷戸方向へと変化しています。

③昭和 30 年代から 50 年代(昭和 36 年と 55 年)

昭和 36 年の地形図では、大南周辺に存在した



旧陸軍施設が、村山診療所や更地となり、残堀川が明確に表示されています。また、福生飛行場が横田飛行場（基地）と改名し、その範囲も拡大したことで八高線の軌道も移動しました。高度成長期の昭和 55 年の地形図では、昭和 37 年に完成したプリンス（日産自動車）村山工場、昭和 41 年に完成した村山団地のほか三ツ藤住宅、大南住宅をはじめとする宅地化と小売店の進出により、広大な畑作地域が少なくなってきました。市役所周辺の表示も市街化地区として、商店や住宅が密集し斜線で示されるようになりました。

④平成期（平成 9 年・平成 18～19 年）

平成にはいると宅地化の波が、中原地域周辺にまで及びます。平成 16 年、日産自動車村山工場の閉鎖に伴い、周辺の小売店の撤退と大型商業施設の建設などで、武蔵村山の様相はさらに大きく変化を遂げていきます。

現在では、学園地域周辺の区画整理や道路の拡

幅工事などが進み、大小の建物の入れ替わりなど、新しい武蔵村山へと変わりつつあります。

4 街道沿いの武蔵村山の変化

市内の全体的な土地利用は、地形図が如実に物語っていますが、人々の生活圏内である街道沿いの変化については、地形図から細かく読み取るとは非常に困難です。

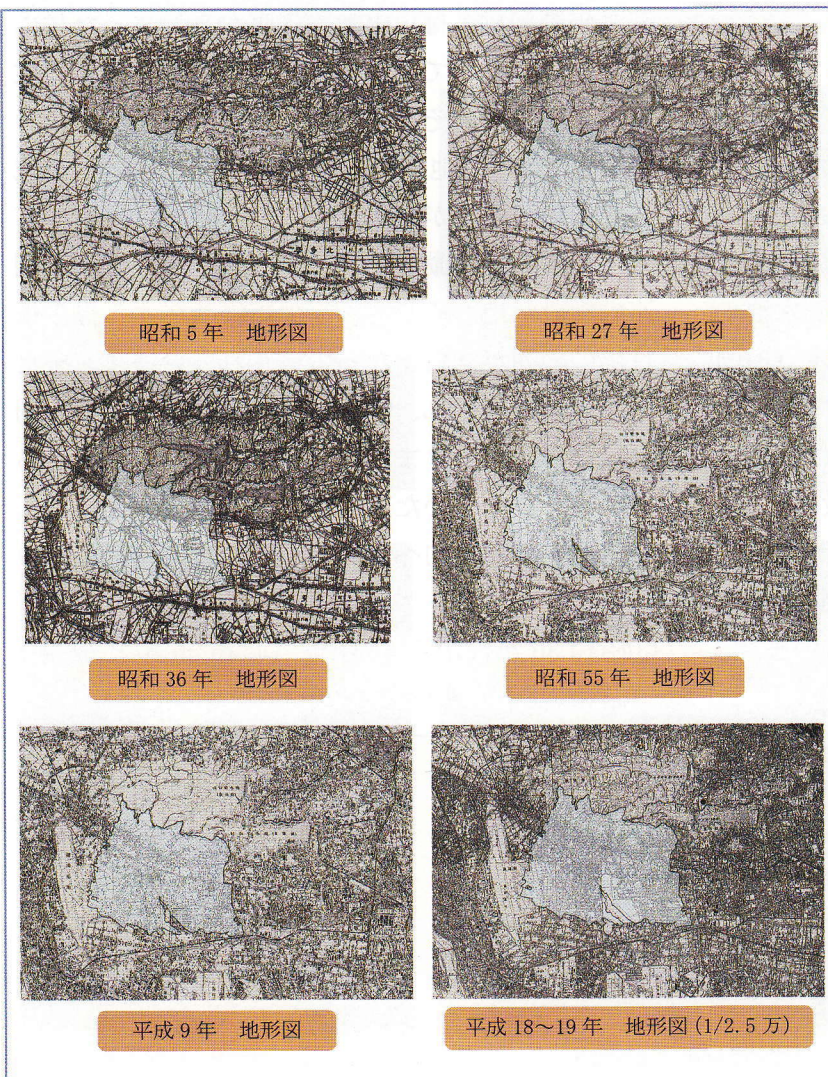
四つの村の各集落を横切る青梅街道・江戸街道などの各街道周辺で営まれた各店舗や工場、諸施設の記録が乏しく、いつの時代からそこに存在し、いつの時代に閉めてしまったのかという人々の記憶が定かでは無くなりつつあります。一方で、市民の方の中には、忘れないようにきちんと記録されている方々もおおり、今回、その聞き取りを行うことが出来ました。そこで、昭和初期から昭和 40 年代までを中心にその一部を図化しました。今回は、青梅街道周辺の小売店をはじめ製造業の一部を色分けして掲載しました。

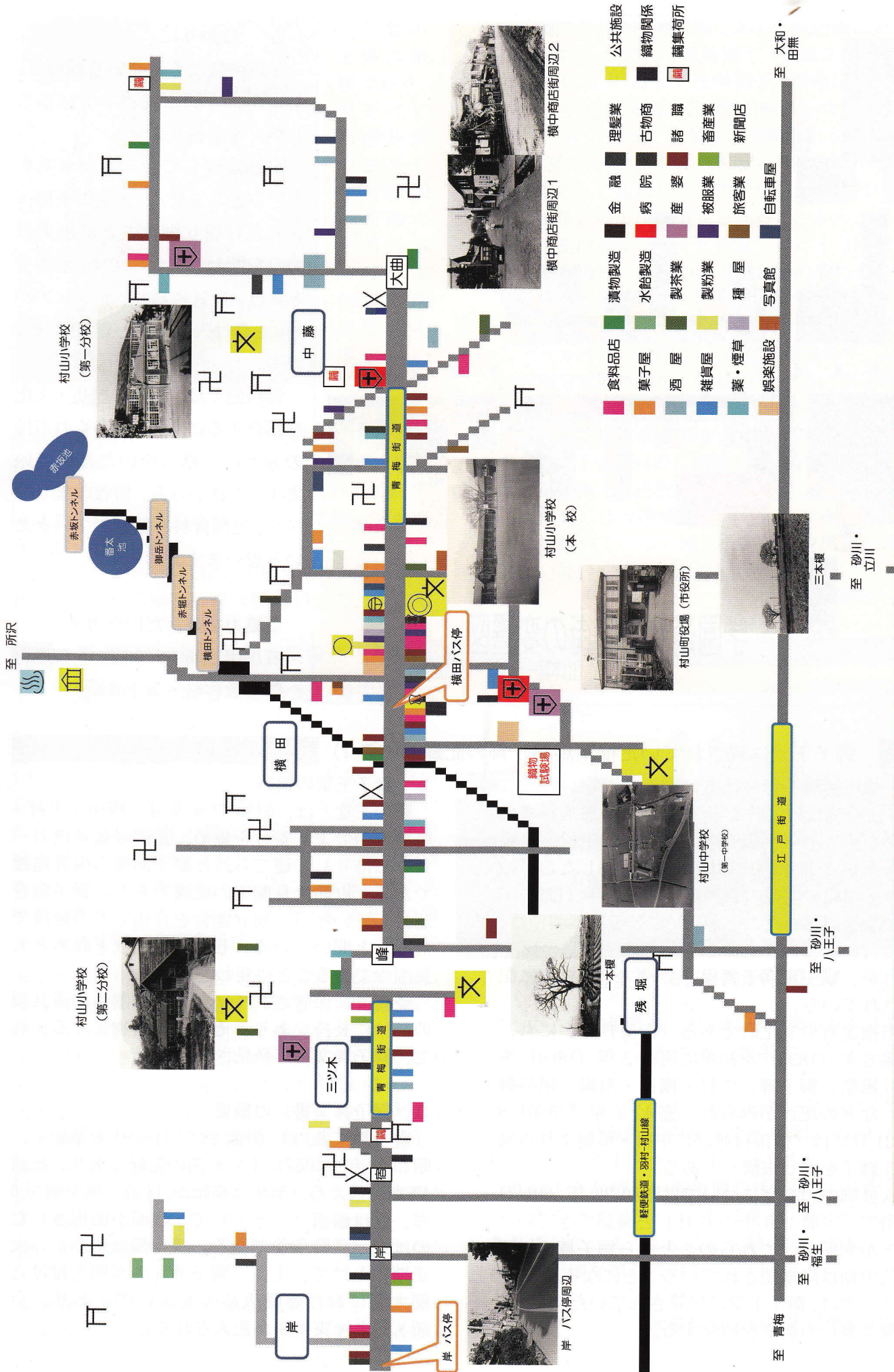
また、昭和 40 年代以降に開発された学園周辺の商店街では、現在もこの地に店舗を構える山本陽一氏が、克明にその記録をされており。

学園通り商店街の変遷図として図化されました。通り沿い描かれている店舗が現在の店舗です。上段は、過去に営まれていた店舗となっています。

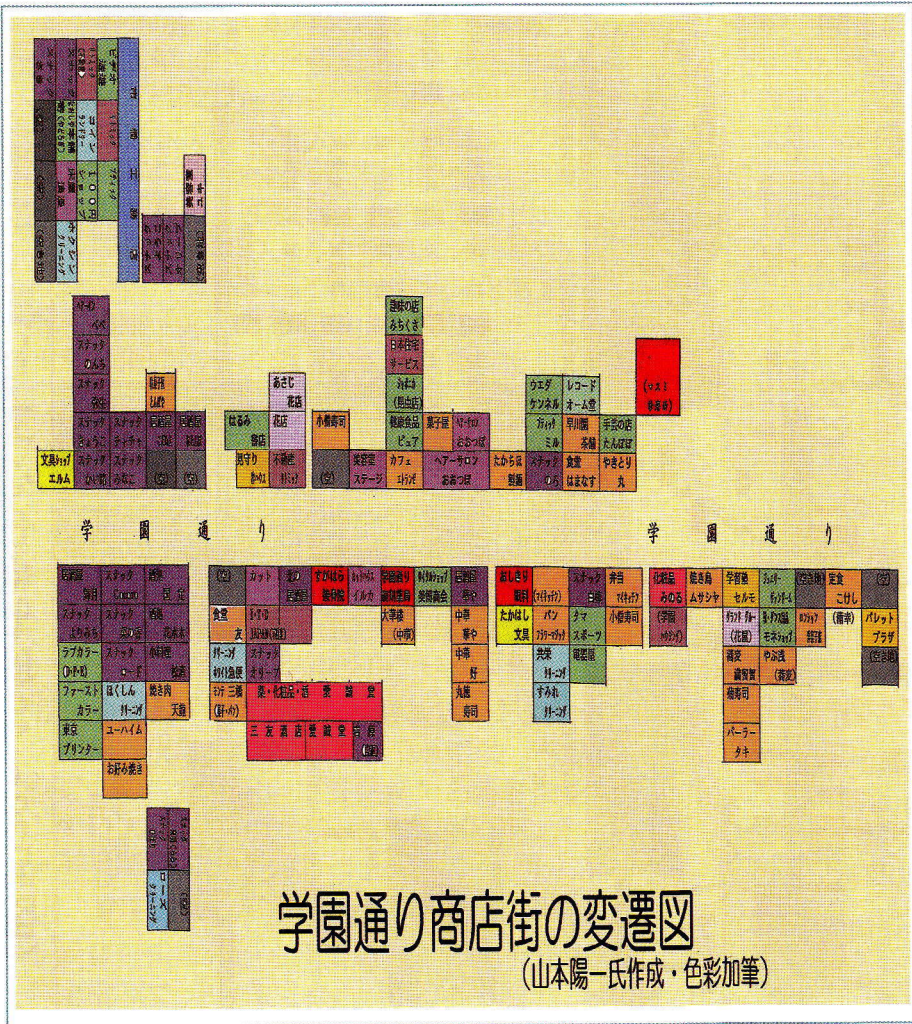
学園通りでは、この約 40 年間で最大 6 回ほどの店舗の入れ替わりをみます。内容的には、飲酒業、食品販売がその半分を占める割合で建ち並び、ほかに日常生活に必要な医療・理容関係のほか、各種業が展開しています。

他にも村山団地商店街、旧日産村山工場前の街道沿い、残堀街道沿いなど昭和 40 年代以降に大きく様変わりした街道が、多数残っています。それらの変化もさらに聞き取り調査をしながら、記録を残していきたいと思っています。





武蔵村山市内の青梅街道の様子 (昭和20~40年代を中心として)



5 おわりに

普段何気なく見ている地域が、あつという間に変わっていることが、ままあります。

記録に残しておきたい事柄もあとを絶ちません。未来の子孫へどれだけ語り継ぐことが出来るのかを問われる昨今です。地図や写真は、身近にあり、ビジュアル的に、受け入れやすい資料の一つです。

資料館では、市内の歴史・文化を紹介するにあたり、多くの市民の方々にご協力をいただいています。これからも、情報収集しながら、地域資料を紹介していきたいと思えます。

ご協力をいただいた方々
 石川伊三郎・山本陽一・渡辺善一郎 (敬称略・五十音順)

獅子王堂に残されていた横中馬獅子舞の記録 (その1)

1 横中馬獅子舞の歴史

「江戸時代の宝暦2年(1752)6月悪病が多発したため、病気平癒を願って横田、中村、馬場の人々が3地区の氏神様に舞を奉納したのが始まり…中略…太鼓の胴の中に宝暦3年(1753)6月の墨書があったことから、宝暦年間の頃には、既に行われていたものと思われる…以下略」これが、横中馬獅子舞保存会パンフレットに記載されている。

市指定有形文化財である「指田日記」にも、天保6年(1835)を初現に明治2年(1869)まで「風祭、獅子舞、中村・横田・馬場一組の獅子」などの記述がみられ、嘉永3年(1850)8月21日には「横田村並びに中村・馬場より古来より獅子を出し来候」とある。

太鼓胴内の文字については昭和22年(1947)段階で「宝暦2年申の6月」と確認できていたことが判明し、これらのことから獅子舞は江戸時代中期以降継続されていることになる。

ここでは、獅子王堂に保管されていた文書(獅子舞文書)の概要を紹介する。

2 獅子王堂の概略

獅子王堂とは、昭和42年9月、横田・中村・馬場自治会より寄付を集め、長圓寺敷地内の一角をお借りして建てられた獅子頭等の保管施設である。以前は長圓寺の庇護のもとに獅子舞を運営していたが、独立運営を目指しての建設であったと聞いている。しかし、出立と収めとも長圓寺であることに変わりはない。

長圓寺に保管されていた獅子舞関係の道具類の一つに長持があり、その中の着物にくるまれて、獅子舞文書が発見された。

3 「獅子舞文書」の概要

「獅子舞文書」は、明治28年(1889)を筆頭に、昭和32年(1957)までの間の記録であり、総数43点を数える。形状は横帳が33点、横半帳が6点、他は帳面(ノート)で、帳面が使用されたのは太平洋戦争後である。横半帳は明治から大正期にかけて、主に「獅子通」の表題を付けた例大祭における購入品の支払い控であり、金額・品名・支払先が記入されている。

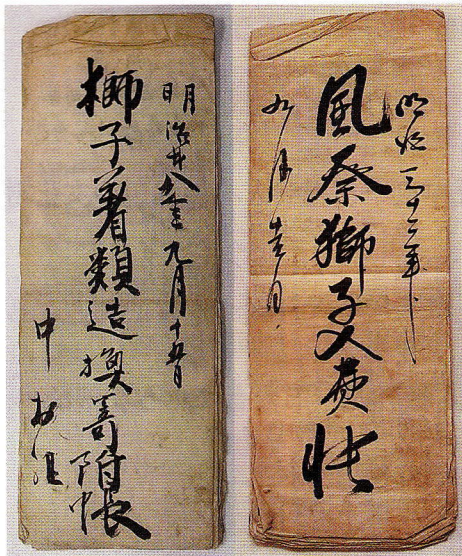


写真1

写真2

文書の主体は横帳であり、祭をはじめ道具類の虫干しや着物類の新調などの行事に伴う寄付者名簿が記載内容の中心で、祭の役者(出演者)

名が記載されている場合も見受けられる。寄付者は、横田・中村・馬場地区に止まらず、武蔵村山市内はもちろん、所沢・入間両市、東京23区にまで及び、横中馬獅子舞の知名度の高さがうかがえる。

最も古い文書は「明治28年(1895)9月15日 獅子着類造換寄付帳(写真1)」で、衣装類

の新調に合わせた寄付帳である。明治期における表題には「風祭」「風祭獅子(写真2 明治32年(1899)9月15日 風祭獅子入費帳)」文字が多くみられ、大正期、昭和期の順に少なくなり、昭和11年(1936)を最後に使用されなくなる。江戸時代の天保5年(1834)から明治4年(1871)まで書かれた指田日記(市指定有形文化財)にも「風祭」の表現が散見されることから、獅子舞も当初は毎年二百十日前後(二百十日は台風来襲の特異日)に行われる嵐を鎮めるための祭りとしての意味があったのであろうか。

残された文書の年代は一定しない、数年続くこともあれば、10年以上の空白期もあり、1冊に数年分記載されている場合もある。太平洋戦争前後では、昭和12年(1937)から昭和20年(1945)までは獅子舞を行った記録は見当たらず(昭和17年(1942)に開催したと伝えられる)、ほぼ毎年虫干しを行っている。そして、昭和21年(1946)には再開していて、その後、毎年のように続いている。地元の方の横中馬獅子舞への熱い思いを感じざるを得ない。

(高橋健樹)

平成24年度の主な事業報告

1 「渡辺酒造寄贈資料総合調査報告書」についての発行後記

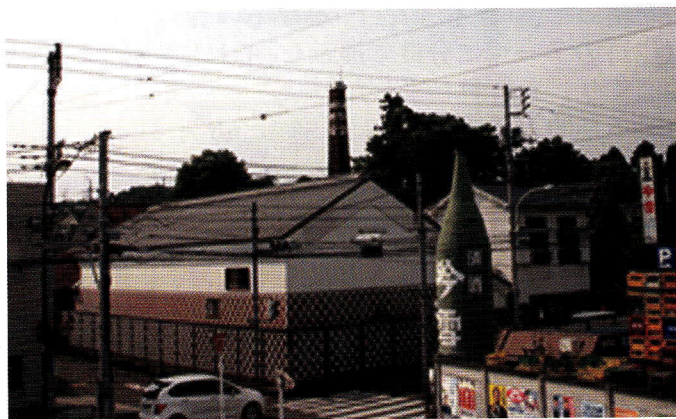
報告書を発行し、関係各位にお渡ししてから早1年近くが過ぎました。この間、報告書をご覧になった方々から、多くの批評・批判・御意見をいただきました。3年の調査期間を設けて報告書完成までこぎつけたのですが、やはり、手違いや調査不足などが影響して、完成品には程遠い報告書であったようです。ここに、批判・意見等の一端を紹介させていただきます。

*より詳細な報告が必要である。この目録では伝票類の概要すら把握できず、問題だ。今後詳細な報告がなされることを期待する。

*用具類に新旧資料が混在しているようであるが、使用年代をより厳密に提示できないか。

*歴史について、明治時代から昭和20年代までは密であるが、その後の動向、特に、廃業までの経緯については淡泊すぎる。“130年の歴史に幕を閉じる”“できれば続けていきたい”との気持ちの葛藤は生半可なものではないと推察する。その状況を時間軸でより忠実に表現すべきではなかったか。

*政府は酒造業を含む地場産業に対する支援を充実させつつあり、評価すべき面がある。書き方



渡辺酒造全景(南東側から望む)

一つで、現在頑張っておられる酒蔵の方々に対し、失礼にあたることを考えて表現すべきではなかったか。

*用具・酒瓶・ラベルに重きを置いたことに異論はないが、酒蔵内部の写真などの既に失われた資料を多く公開すべきではなかったか。

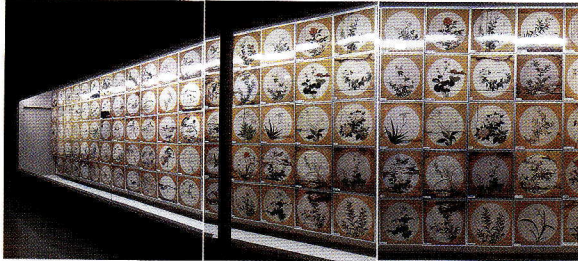
このような厳しい御指摘のほかにも、“冊子にまで漕ぎつけたことは評価できる”との御意見もありました。こうしたことを踏まえ、今後もより詳細で正確な調査に努めてまいります。

武蔵村山市立歴史民俗資料館

2 特別展「武蔵村山の古刹“眞福寺”」

和銅3年(710)と伝えられる眞福寺の市指定文化財「格天井花鳥画」「梵鐘」「本堂棟札」などを写真と実物で展示し、寺の歴史について解説しました。詳細は平成24年度特別展解説書「武蔵村山の古刹“眞福寺”」(定価400円)をご参照ください。なお、この期間に合わせて、文化財見学会「眞福寺とその周辺の文化財を巡る」、歴史講座「眞福寺を語る」を開催しました。

*展示期間：平成24年10月6日～12月9日



眞福寺格天井花鳥画写真パネル展示風景

3 企画展「村のくらし～膳碗組をとおして～」

明治時代から昭和30年代にかけて、冠婚葬祭などの際に組などの共有財産である膳碗を使用していました。その膳碗や文書を展示しました。

*展示期間：平成24年5月19日～6月17日

4 夏休み子ども展示「原始・古代ものづくり」

武蔵村山市内から出土した原始・古代の道具類を使って、「きる(衣)」「食べる(食)」「すむ(住)」のテーマに分けて展示し、それに係る「ものづくり」を解説しました。

*展示期間：平成24年7月21日～8月31日

5 ミニ企画展「武蔵村山の戦争資料」

武蔵村山では、昭和20年4月2・4日の2回の空爆被害を受け、亡くなった方もいました。それら残された記録や戦争資料を展示しました。

*展示期間：平成25年3月10日～3月31日

6 歴史講座「眞福寺を語る」

- (1) 期日：平成24年11月17日(土)
- (2) 会場：武蔵村山市立歴史民俗資料館
- (3) 講師：中藤祥瑞氏(眞福寺住職)

7 文化財見学会「眞福寺とその周辺の文化財を巡る」

- (1) 期日：平成24年10月20日(土)
- (2) 会場：歴史民俗資料館・眞福寺他
- (3) 講師：中藤祥瑞氏(眞福寺住職)

8 子ども体験教室「石器をつくろう！」

- (1) 期日：平成24年8月4日(土)
- (2) 会場：武蔵村山市立歴史民俗資料館
- (3) 講師：石川悦子資料館学芸員

9 星空観察会

- (1) 期日：平成24年8月18日(土)
- (2) 会場：武蔵村山市立歴史民俗資料館・のぞみ福祉園駐車場
- (3) 講師：高橋芳弘氏(昭島天体観測所)

10 自然観察会「狭山丘陵の早春」

- (1) 期日：平成25年3月9日(土)
- (2) 会場：都立野山北・六道山公園
- (3) 講師：鈴木君子氏(日本野鳥の会)

11 狭山丘陵市民大学「三多摩の自由民権運動と狭山丘陵の村むら」(3回実施)

*東村山市・東大和市との3市合同の講座。

- 第1回 (1) 期日：平成24年12月1日(土)
(2) 会場：東村山ふるさと歴史館
(3) 講師：新井勝紘氏(専修大学教授)
- 第2回 (1) 期日：平成25年1月19日(土)
(2) 見学場所：入間市立博物館・あきる野市図書館
- 第3回 (1) 期日：平成25年2月16日(土)
(2) 見学場所：町田市立自由民権資料館

8 資料館入館状況 (平成24年度)

区分 月	開館日数 (日)	利用者数 (人)	市 内		市 外	
			人数(人)	割合(%)	人数(人)	割合(%)
4	28	1,592	503	31.6	1,089	68.4
5	29	1,825	712	39.0	1,113	61.0
6	21	816	386	47.3	430	52.7
7	29	1,054	439	41.6	615	58.4
8	29	1,243	515	41.4	728	58.6
9	28	922	396	43.0	526	57.0
10	29	1,688	477	28.3	1,211	71.7
11	28	1,692	531	31.4	1,161	68.6
12	25	811	317	39.1	494	60.9
1	26	979	571	58.3	408	41.7
2	26	1,148	594	51.7	554	48.3
3	29	1,404	660	47.0	744	53.0
合計	327	15,174	6,101	40.2	9,073	59.8

狭山丘陵南麓西側の自然 part 4 - 可憐な花の一生 -

自然の散策中にふっと目につく白や赤い花、そのようなことから“植物”に興味を持たれた方も多いのではないのでしょうか。ご存知でしょうが、その花たちが目に留まるのは人間のためではなく、昆虫に気が付いてもらうための工夫の一つです。今回は、花の咲く前から注目していただき、花が終わってからも観察していただくために、その花たちの蕾→花→実（花後）の様子を紹介します。

近年、東京都立野山北・六道山公園内において、植物の盗掘が数多く発生しています。狙われるのは絶滅危惧種などに指定されている希少植物たちがほとんどです。“希少だから売れる”“希少だから自分の手元に置こう”ではなく、自生している場所で新芽から蕾から観察し、楽しもうではありませんか。自生することは、その自然環境が植物に適していることを意味します。みんなでその自然環境を保全し、可憐な花たちに会いに行きましょう。

(写真提供：吉田政一氏)



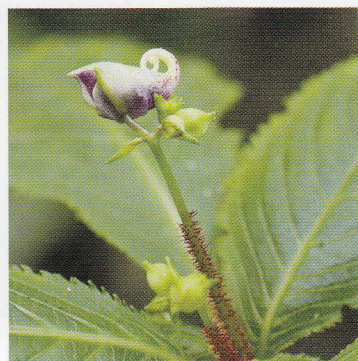
イチリンソウ (蕾)



(花)



(実)



ツリフネソウ (蕾)



(実と花)



アギナシ (花と蕾：上) (実：下)



ジュズダマ (花)



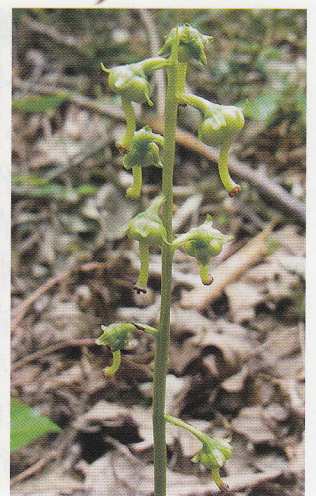
(実)



イチヤクソウ (薔)



(花)



(花後・実)



ガガイモ (薔)



(花)



(実)



ツルリンドウ (薔)



(花)



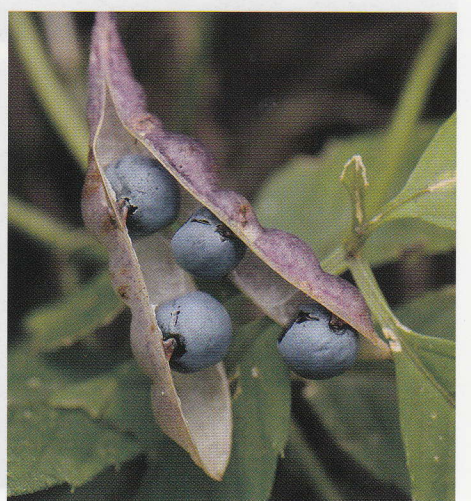
(実)



ノササゲ (薔)



(花)



(実)



ヤマジノホトトギス (蕾)



(花)



(実)



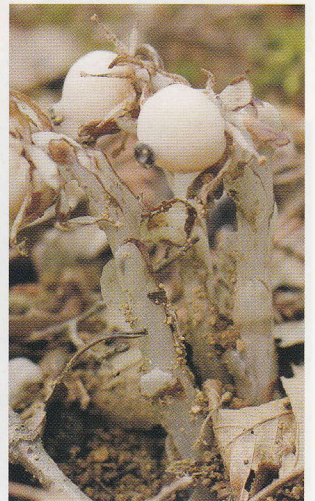
シャクジョウソウ (花)



(花後)



ギンリョウソウ (花)



(花後)



ヒメザゼンソウ (花)



(実)



フユイチゴ (蕾)



(花)



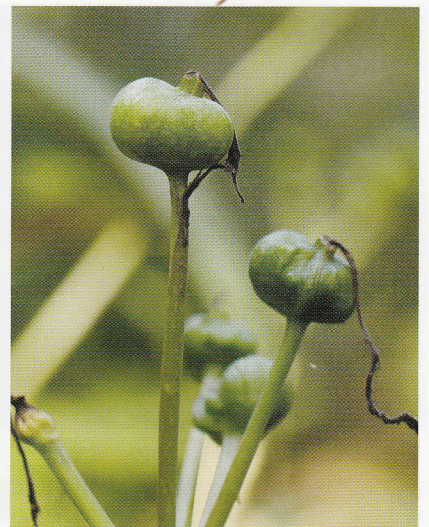
(実)



キツネノカミソリ (蕾)



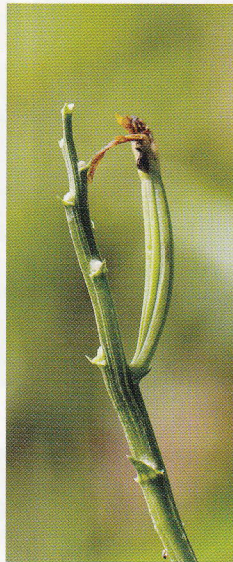
(花)



(実)



キンラン (花)



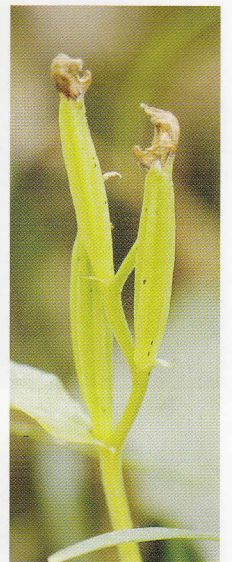
(実)



ギンラン (蕾)



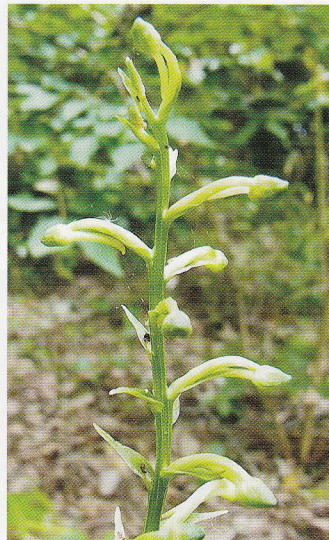
(花)



(実)



オオバノトンボソウ (全体)



(蕾)



(花)



(花後)

発行：武蔵村山市立歴史民俗資料館

〒208-0004 東京都武蔵村山市本町 5-21-1

TEL 042 (560) 6620/FAX 042 (569) 2762

Mailアドレス mmc-reki@blu.m-net.ne.jp

HPアドレス <http://www.city.musashimurayama.lg.jp/shiryokan/index.html>